Kikuzawa, Sueo
Kokugogaku Kokugo iso ron

国語学

国語位相論

菊澤季生

國語科學講座

—III—

國語學

國語位相論

菊澤季生

株式會社
明治書院

國語科學講座

— Ⅲ —

國語學

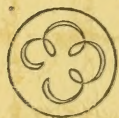
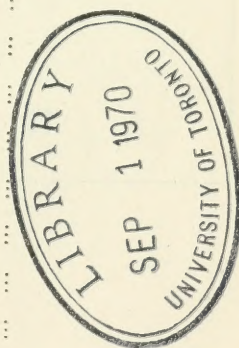
國語位相論

菊澤季生

株式會社
明治書院

目次

序論

本論

國語位相論

菊澤季生

一

國語學の研究部門の一つとして「位相論」の存すべき事は、既に東北帝大言語學談話會の編輯の「言語」（第一輯）の論文「國語學の研究部門と位相論」及び雜誌「教育・國語教育」の特別號（國語教育の科學的研究）の論文「國語の科學的研究に就て」に於て發表したのでありますけれども、何れも最近の事柄に屬し、未だ十分徹底してゐない憾みがありますので、順序として、國語學に於てそれが占める位置を略說する事から、位相論の記述を進めて行きたいと存じます。

二

最近我國に於ては、我國固有の文化を反省し、再吟味を加へようとする傾向が頗る顯著でありまして、我が國語・國

文に關する研究も頗る活潑となり眞劍味を帶びるに至つた事は甚だ愉快な事柄でありますが、文學方面の研究の旺盛なのに比べますと、地味な基礎的な作業たる國語學の方面は稍〻閑却された嫌がありました。この國語學の不振を慨歎しつゝあつた我々に取りましては、明治書院今回の國語科學講座の企圖は誠に我が意を得たものと言はねばなりませんが、國語學の從來の研究成績は、この今日までの不振を反映して多くの點に不備な箇所のあるのを發見致します。國語學の研究範圍、各研究部門の分類と組織の如き根本問題に於てさへも、少なからぬ缺陷を曝露致して居ります。實際この樣な根本問題に關する論議は、これまで殆ど顧みられなかつたかの如き觀があります。

元來國語學は、我が國語を研究の對象として、これを科學的に言語學的に考察する學問でありますから、これが研究部門を分析的に分類するとなれば、その研究對象となる國語卽ち言語の一種たる所のものに就て、分析のメスを振はなければなりません。然るに、言語はその要素として外形たる音聲と內容たる意義との兩方面を持つてゐるのでありますから、國語學の研究部門も自然それら兩方面に對應して、音聲方面を取扱ふ音韻論と意義方面を取扱ふ意義論とに二分せられる事になります。

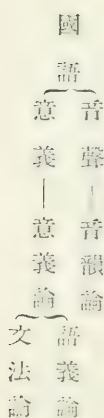
意義論（La sémantique）をこの樣に廣義に解したものは、從來の著述には殆ど見當らないのでありますが、フランスの言語學者ドーザ（A. Dauzat）の「言語哲學」（La Philosophie du Langage. Paris 1927）はこの樣な見解を採用して居ります。この意義論を更に細分するに當つて、ドーザは文法論と語彙論（lexicologie）とを立て、後者は單語の意味並に經歷を研究するものとしてゐるのでありますが、單なる個別的研究の他に、イエスペルセン（O. Jespersen）が「文法哲學」（The Philosophy of Grammar. London 1924）の序論に於て論及した樣に、單語の意味の理

論(theory of the significations of words)といふ共通的な性質の認識、卽ち法則の發見といふ事柄を考慮に入れるならば、これは寧ろ「語義論」と唱へる事の適切なのを覺えるのであります。

而して、この樣な廣義の意義論に於ける語義論と文法論との二分は如何にして行はれるであらうか、この點を明快に說明したものは、從來の著述には見當らないのでありますが、これは言語に於ける音聲と意味との對應が分節的(ge-gliedert)である點を顧慮すれば容易く解決し得るものと思はれます。卽ち、言語の音聲連結(例へば、ハナ・サク)が如何にして思想の分節たる個々特定の意義內容を賦與せられるか(例へば、ハナが「花」又は「鼻」の意義を保持し、サクが「咲」乃至「裂」の意味をもつ事)の樣な意義存立の根本問題を取扱ふか、或は旣に成立した個々の意義內容を有する音聲連結(卽ち、單語ハナ及びサク)がまとまつた思想の表現のために如何に配置運用せられるか(例へば「花咲く」或は「咲く花」等)の樣な一般法則的な問題を取扱ふかによつて分たれるのであります。前者が語義論であり、後者が文法論である事は言ふまでも無いでせう。

かくて、國語學の分析的な研究部門は、舊說の樣に文法(Grammatik)と辭書(Wörterbuch)とに盡くされるものではなく、次表の樣に分類表示するのが適切である事を覺るべきであります。

國語
- 音聲 ― 音韻論
- 意義 ― 意義論
  - 語義論
  - 文法論

三

以上の様な國語學の研究部門は、全く分析的な方面のものでありますから、更にこれに對立して綜合的な方面がなければならない事は明かであります。この綜合的方面も、また、國語學の對象たる國語を中心として考察しなければなりませんが、國語の二要素たる音聲と意味との結合は何によつて行はれるかを見るに、それは國語自身の保持する所ではなくて、この國語を使用する所の言語社會、即ち我が日本國民といふ社會的集團によつて維持せられてゐるのであります。

然るに、この様に國語を支配する所の國民の言語社會は、必ずしも一定の姿を持つてゐるものではなく、様々な様相を以てあらはれて來るものでありまして、その様相の異る毎にそれに支配されてゐる言語もまた様相を異にするものであります。固より、我が日本語におきましても、否むしろ我が國語に於ては特に著しく、この様に様相の異つた種々の姿が見られるのでありまして、これら種々の様相に於ける國語も夫々我々の科學的研究の對象とならなければなりません。

水は固體である時は氷といひ、氣體と化せば水蒸氣とか湯氣とか唱へられるのでありますが、物理化學的に見ますとこれは全く同一の物質でありまして、たゞ位相（phase）を異にするに過ぎないと認められてゐます。この「位相」なる術語を國語學にも採用致しますならば、「言語は社會が位相を異にする毎にその位相を異にし、國語學者は、この様に國語が位相を異にする毎にこれを研究する必要があるといふ事になる譯であります。國語學の綜合的研究の一面に

けこの位相の相違による特殊の事實を認識し、位相の相違による變化の狀況を究め、その間にはたらく法則を見出すべき方面の存する事が分るのでありまして、この様な研究部門を名づけて位相論（英語にすれば Phaseology）と唱へようと思ふのであります。

國語が實際に現はれる場合は、この様に必ず一定の姿をとるものである事は、丁度或る個人を寫眞に撮れば必ず笑つてゐるか、泣いてゐるか、怒つてゐるか、すましてゐるかと言つた風の或る一定の心的狀態に於て現はれるのと同様でありますが、而も多くの姿態を通じてその個人の全貌を知り得る様に、我々も我が國語の種々の位相を通じて、國語の全貌、その本質を把握する事が出來るのであります。何となれば、國語の具現する姿は種々の位相を取つてゐるのでありますが、國語そのものは各位相における支離滅裂なものではなく、我が日本國民といふ言語社會を背景とした統一ある存在だからであります。國語をこの様に統一ある一活動の全體として眺める研究部門、これを構成論と唱へるならば、國語の綜合的研究は一面的な位相論と全面的な構成論とに歸し得る譯であります

この國語の一般的研究に對しては、安藤正次教授はその近著「國語學通考」に於て「一般國語學」の名稱を與へその取扱ふべき内容に關しては、

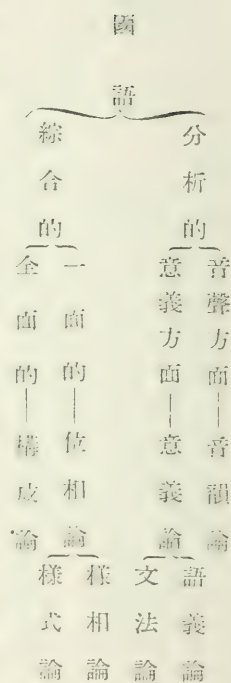
一般國語學は、國民精神の表現として國語を考察し、國語の特性を闡明し、いかにして國語の純正を擁護して、その健全なる發達を期すべきかを講じ、さらに進んでは國語政策上、國語教育上の諸種の問題を攻究する部門である。

と記述せられて居り、我國の國語學者の中には、他にもこの様な見解をとられる人々もないではありませんが、この「いかにして」以下は國語の言語學的考察の領域を逸脫し、國語政策乃至國語教育が取扱ふべき部門でありまして、所

謂「國語科學」の領域には攝取し得るとしても、國語學の範圍の外にあるものと解するのが穩當でありませう。

同じ様な意味で、普通の場合國語研究の一部門として取扱はれ來つた文字の研究の如きも、文字學なる國語學に對立した（併し關係に於ては密接な）學問の所攝と考へるべきものでありまして、所謂國語科學には含み得ても、國語學の領域からは除外すべきものでありませう。この點に關しては、安藤教授の「國語學通考」に於ける取扱は當を得たものと考へられます。この様に、國語學から文字學を除外すべしとするのは、言語がその要素として音聲と意義とを具有するものであつて、文字はこれを表現する用具にすぎないからでありますが、併し言語は文字による表現をとる事に依つて、自ら文字によらざる直接の表現、即ち音聲言語（Lautsprache）の場合と位相を異にし、此處に位相論的研究の對象となる事が見出されるのでありまして、文字言語（Schriftsprache）に關聯して新な位相論上の領域が展開する事を認め得る次第であります。

この様に、新な領域を加へた位相論は、言語社會を背景としてその位相の相違を考察すべき場合と、音聲言語か文字言語か等の表現様式の相違を背景とする位相の相違を考察すべき場合とに二分せられるのでありますが、以前の拙稿の様にこれを夫々口語論・文語論と名附ける事は多くの誤解を惹き起しますので、今後はこれを様相論・様式論と唱へようと思ふのであります。即ち「様相論」は社會を背景とする狹義の位相論であり、「様式論」は表現様式を背景とする方面の位相論を指すのであります。

以上論述して來た所の考察をまとめて表示するならば、國語の分析的・綜合的研究は次の様な部門に分ち得る次第であります。すなはち、

國語學の研究上、位相論の占むべき地位はこの表によつて明瞭に知る事が出來るでありませう。

- 國語
  - 分析的
    - 音聲方面――音韻論
    - 意義方面――意義論
      - 語義論
      - 文法論
  - 綜合的
    - 一面的――位相論
      - 様相論
      - 様式論
    - 全面的――構成論

四

この様に、國語學の研究部門中に於て位相論が占むべき位置は明瞭に指示せられ、それに屬すべき部分的研究は從來と雖もなされて來たのではありますが、それらを組織的に綜合して研究したものは、その名稱が生れてゐなかつたと同様に、未だ行はれてゐなかつたのであります。それ故、これに組織と內容を與へる事は容易く出來ない業なのでありますけれども、位相論の存在を主張し來つた責任上、甚だ不充分ではありますけれども、以下に試案を示して見ようと存じます。

先づ位相論は、前述の通り、様相論と様式論とに二大別せられるのでありますが、前者即ち狹義の位相論と言ふべき様相論の方から考へて見る事に致しませう。様相論は言語社會の位相に應じて、國語がその様相を異にする場合を研究するものでありますが、これは大別して三種の場合を擧げる事が出來ます。即ち

（a）社會的・心理的 ── 階級方言・特殊語

（b）地　域　的 ──（地域）方　言

（c）生理發達的 ── 兒　童　語

となります。

第一種の社會的心理的に位相が相違する結果は、從來階級方言（class dialect）又は特殊語（special language）と言唱へられた種類の言語を生み出すのでありますが、我が國語には嚴密な意味の階級的差別を賦與された階級方言と言ひ得るものは存在せず、特殊な言語社會乃至社會團體に於て、一般の社會とは別な心理的狀態から生みだされた特殊な樣相の言語の實例のみが存在した樣であります。例へば、神宮の忌詞・僧侶語・商人語・盜賊語・女房言葉・陣中言葉・廓言葉などがそれであります。

第二種の地域的に位相の異なる言語は、普通に方言と言はれる所の地域方言でありますが、この方言の研究は近來頓に盛んとなり、これを特に方言學（dialectologie）と言ひ、更にひろく言語地理學の名稱をさへも耳にするに至りました。併し、位相論的見地からすれば、單に左方の言たる方言の外に、地域を超越した共通語（common language）乃至は中央標準的な中央語も考へられる次第であります

最後に、第三種の生理發達的な方面から考へられた位相の相違は、兒童語を發見するのでありますが、詳しく言へば嬰兒語・幼兒語・少年語が分たれ、更に進んでは青年語・壯年語・老年語も考へ得るのでありますが、これら個人發達の各期に應じた差別の如きは未だ充分研究せられてゐないといふのが現狀であります。否、我國に於きましては、

兒童語の研究の如きもれく、最近の事情に屬し、而もそれらの研究は寧ろ心理學者の手になされたかの如き觀があつて、國語學者は全く一顧だにせざるの風が見えます。これは甚だ以ての外の事と考へられますが、一つには國語學に於けるこの研究部門の存在を從來氣附かなかつた爲でもありませう。

以下、樣相論のこれら三種の各々に就て、順次考察を進める事に致しませう。

五

樣相論の第一種、即ち社會的・心理的に位相を異にしたものとして、我が國語文獻に最も古く現はれるものは、彼の齋宮の忌詞であります。これに關しては、安藤正次氏が國學院雜誌第十九卷第七・八號の「異名隱語の研究を述べて特に齋宮忌詞を論ず」（大正二年七・八月）に於て詳しく記述してゐられるのでありますが、順序として先づこれを冗上にのぼせる事に致しませう。

文獻に現はれた忌詞の最も古いものは、彼の延暦廿三年八月廿八日（西暦八〇四）撰進の皇太神宮儀式帳の記載でそれには、

亦種々乃事忌定給支

人打乎　奈津止云

鳴乎　鹽垂止云

血乎　阿世止云

[illegible]

宍乎　多氣止云
佛乎　中子止云
經乎　志（皆イ）目加彌止云
塔乎　阿良々支止云
法師乎　髮長止云
優婆塞乎　角波須止云
寺乎　瓦葺止云
齋食乎　片食止云
死乎　奈保利物止云
墓乎　土村止云
病乎　慰止云
如是一切物名忌道定給支

とあつて、一般と異る意味の單語十四が列擧せられてゐる。貞觀儀式の大嘗祭の條には、その忌語として、

死　ニ稱奈保流一
病　ニ稱夜須彌一
哭　ニ稱鹽垂一

血　稱二赤汗一

宍　稱レ菌　宍人亦同

を挙げてをり、延喜式には、齋宮・齋院・大嘗祭の三ヶ所に見えるが、その忌詞は大體上記のものと同じであるが、ただ、

尼　稱二女髪長一

堂　稱二香燃一

といふ二語が加はり、且つ、忌詞を分類して内七言（佛・經・塔・寺・僧・尼・齋）外七言（死・病・哭・血・打・宍・墓）及び別忌詞（堂・優婆塞）としてある所が異る。

ずつと後世のものでは、伊勢勅使部類記長治二年八月十三日（西暦一一〇五）勅使内大臣源雅實公發遣條にも、この種忌詞の一部が見えるが、その中に

佛　云二立礙一

寺　云二古利一　又云二瓦葺一

の二語が見えるのは、注意すべきである。文保記（「群書類從」卷五二三）永正記（同五二四）の記述は延喜式のそれをそのまま引用したもので、

齋　云二片膳一

とした所は、皇太神宮儀式帳のものとは異つてゐる。

以上は文献に見える忌詞の實例でありますが、何れも單語を言ひ換へたにすぎないもので、音韻や文法に關しては何等普通一般の場合と相違したものを見出す事が出來ないのであります。併しながら、その單語の言ひ換へに際しては、佛・經・塔・法師・優婆塞等の漢語乃至梵語を避けて純國語を用ゐてゐる所に、自然外國流の音聲をも避ける事になつてゐるのは注目すべきであります

更に、延喜式に於ける齋宮の忌詞に關しては、内外の區別を立てゝあるのも注目すべきでありますが、これに關しては、足代弘訓の所說が禁忌類聚卷七に見え、

自餘ノ神祭ハ佛ノ忌ム事伊勢ノゴトク嚴ナラザル故ニ、内七言ナシ。伊勢ハ佛ヲ忌ムコト其制殊ニ嚴ナル故、内七言アリ。内外ト稱スルハ、内ハ内典ノ語ニテ佛語ナリ。外ハ外典ノ語ニテ儒家及諸家ノ語ナリ。

とあり、熊澤蕃山の集義和書にも、

佛・經・塔・寺等ノ七言皆内典ノ文字故内トシ、死・病・哭・血等ノ七言ハ儒經歷史百家ノ書ニ出デタル故ニ外トセル也。

とありまして、その分類の標準が伺はれるのでありますが、これによつても忌詞なるものの存在理由が明かにせられます。

つまり、忌詞は、その包含する所の語彙は僅少に過ぎないのでありますが、その意圖する所は神道の立場に於て儒佛の語彙中の顯著なものを忌避したのでありまして、その個々の單語の言ひ換へに際して細かく觀察すると、安藤正次氏の指摘せられた様に種々の心理作用のはたらいてゐる事を見出すのでありますが、全體を通じて見出される現象は、神事に於て清淨を尙び汚穢を斥ける精神の作用と、特に異分子たる佛教關係語を潔しとしなかつた點に歸着する

のであります。
忌詞はこの様に特殊の小社會に於て、特殊な理由によつて發生した一小語彙にすぎないのではありますが、而も意圖的に一般の言語社會から隔離しようとした點に、位相論的意義は顯著でありまして、この小語彙の中からも僅か一つではありますが「しほたれ」といふ語が一般化して廣く用ひられるに至つたのは興味深い事柄であります。例へば

拾遺集（雜戀）に「しほたるゝ身はわれとのみ思へども、よそなるたづも音をぞなくなる」

宇津保物語（藏開中）「いとおもしろく悲しければ、聞こしめすみかども御しほたれ給ふ」

源氏物語（桐壺）「前の世ゆかしうなんと打ち返しつゝ御しほたれがちにのみおはします」

などがその一例であります。
なほ、忌詞に關して、以上のもの以外の例を拾ひ上げたものには、瀧澤馬琴の「兎園小説」中の「齋語」の記述がある。些細なものではあるが、紹介して見ると、

忌詞は、延喜式に、齋宮の内外の忌詞を載せたれにいとふるし。今も雨をおさくり（滑稽雜談）、寝るをいねつむ（世事綺談）といふは、正月の忌詞なり。

六

以上述べた忌詞は、職業的に見れば、神官に關するものであるが（最後に附加した一語に就ては必ずしもさうは言へない）、これに對して僧侶の用ひた隱語もある。これに就ては、矢張り、前節の最後に擧げた馬琴の「兎園小説」中

に記述してあるが、それによると、

僧徒に隠語あるは久ふるし。東坡志林に、

僧 謂レ酒 爲二般若湯一、

魚 爲二水梭花一、

鷄 爲二鑽籬菜一

といへり。また一休ばなしに、一休和尚の蛸をもとめられて、千手觀音蛸手多と云ふ頌を作られしも、その比の隠語なるべし。

今も

酒を　唐茶といひ、

蛸を　天蓋といひ、

妓童（カゲマ）を　善男子、

衣服のなきものを　誕生佛

といへり。去りし比山岡明阿の話とてきけるは、甲斐の身延山の僧徒の隠語に、

女の事を　花といへり。

ある時、一寺の門前を女の通りけるを、僧の見て、よき花の通るはといへば、一人の僧、たゞぬかといふ。答へて、花瓶がないといひけるとかや。

花瓶とは　金の事なりとぞ。

かれなくて心にまかせぬといへることなるべし。

この記述によつて十個ばかりの僧侶の隱語が拾ひ上げられるのでありますが、安藤正次氏は更に「麓の色」卷五（「近世文藝叢書」風俗卷十） の記載によつて、

女を　イノ一、又は天悦、

若衆を　大悦

といふ樣な例をも擧げてゐられる（異名隱語の研究を述べて云々の論文）。

この場合に於ても、神官の忌詞の場合同樣、僅少の語彙に過ぎず、音韻や文法の方面には何等の特徴をも示さないのでありますが、それと正反對な事は、僧侶語に於ては、純粹の國語を捨てゝ、好んで漢語乃至梵語を使用してゐる點であります。

この樣に、好んで一般には分り難い漢語・梵語を用ひたのは、目黒和三郎氏が「方言及隱語」（國文論纂に收む）に於て論及せられた樣に、「酒色肉食を禁戒として、他にそれを聞かすることを厭ひ、おのれの方にちなめる語をとりて、隱語とせるなり」（五四一頁）といふ理由に基づくものでありまして、この樣な心理的な意圖が普通一般の言語とは樣相を異にせる特殊語を生み出す事になるのであります。それと共に、その意圖の下にえらび出される單語が「おのれの方にちなめる語」であること、換言すればその樣な特殊語を生み出す言語社會に於ては普通なものを採用し、特殊な意味の語を一般化する事にも注目せねばならないと考へられます。そこでこの點を更によく理解するために、商人社會の用うる言語を観察して見ませう。

七

商人語に關しては、馬琴の兎園小說の「隱語」の部の冒頭に「唐土に市語あり。委巷叢談に見えたり。（六ほ彼邦に隱語謎語あれど予が猜藥に載せたればこゝにしるさず。）」とあつて、支那に於てもそれが行はれてゐた事が分るのであるが、これは必ずしも隣邦の事として對岸の火災視出來ないものでありまして、桂川中良の「桂林漫錄」（寬政十二年序）を繙きますと、下卷「市語」の所に、次の樣な記述があります。卽ち、

往年薩州の人の、隱語にて拳を打を見たりしが、一をタンソコ、三をヨロガハ、七を毛ノ尻、九を丸マラズなどと云たるを興あることゝのみ聞過せしが、此頃堅狐集に、委巷叢談の市語を載したを見て、始めて唐山の市語なる事を知る。抗人三百六十行、各有二市語一（中略）不レ若下吾鄕市語有中文理上也、一爲二旦底一、二爲二斷工一、三爲二橫川一、四爲二側目一、五爲二醫丑一、六爲二撒大一、七爲二毛根一一作二白脚一、八爲二入開一、九爲二未丸一、十爲二田心一。全く是より出たるなり。東都の一大刹に數字の廋辭あり。一大無人　二天無人　三王無中　四罪無非　五吾無口　六交無人　七切無刀　八分無刀　九丸無ノ　十千無ノ。これも亦文理あり。

とあります。

支那の隱語は、流石に文字の國だけあつて漢字の形體に由來し、この樣に所謂文理がある譯でありますが、我が國語の場合に於ては、この種のものは多くの場合行はれないのであります。ただこの樣な支那の隱語までが我が國に直輸入せられて、或る場合に行はれるといふのは、我が國民が如何に模倣性が強いかを物語るものでありませう。日黑氏が上記の論文「方言及隱語」にもこれを引用し、

これに就きて、又思ひ得たることあり。東都魚問屋などの隠語に、九鏡九圓等、九字のかゝる場合に、丸點無しといひ、十の場合に千點なし、四の場合に横目などいふことを聞き及べり。これらは右の市語より轉化せるものなり。

と論及せられたが、明治以後に至つてもこれらの語が行はれてゐる事に想到する時、隠語の壽命も案外短くない場合もある事が感ぜられるのであります。

併し、兎に角、これらは稍脱線的な例でありまして、馬琴の「兎園小説」は更に、

> 吾邦の工商おのおのその職業によりて隠語あり。屋根屋にて、熱き飯と冷飯とをまじへしをふる板まぜといひ、縫はく屋にて、から汁にむきみを入れたる事に千鳥といへり。

といふ例を擧げてゐるのは、語彙は僅かでありますが、純粋な國語起源のもので、職業的社會の特殊語を以て普通語に轉ぜしめた好個の實例であります。

日黒氏は、矢張り、これらの例をも擧げた後、その理由に就き論及して「隠語の由來性質を考ふるに、或る事物を人にそれと知らしむることを厭ひ、又はこれを憚るより生ぜし事と思はるゝなり。故に下等社會に多く行はれ、其中營業利益を主とせる工商家などに行はるゝなり」とせられたが、この最後の營業利益を主とするの趣旨から出て、特に利得を喜び損亡を忌む所から、所謂縁起をかついだ語が往々行はれてゐる事も、見逃せない事實であります。その實例は高橋龍雄氏の「應用言語學」明治三十八年刊の「言語の迷信」の章に多く見出されますので、それから拾ひ上げ

て見ますと、

葦はアシであるが、惡しと通ふから、ヨシといひ、

梨はナシであるのが、無しといふに通ふから、アリノミといひ、

猿といふ語は去ると聞ゆるから、これをエテ（得て）といひ、

硯箱のスリの音を嫌つて、アタリ箱といひ、同じく

剃刀（カミソリ）もスリ減る事を含むので、アタリ金（ガネ）といひ、

四といふ數の音が常に死（シ）と聞ゆるので、シといはずにヨといつて居る。文明の今日でも、電話番號に四百四十四番といふやうな號數は申込がないとて、省いてあるといふ事だ。

などがあります。これらになると、最初に擧げた齋宮の忌詞などと共通な心理作用のひらめきを見るのであります。

而も、これらの場合になると、この節の冒頭に揭げた字謎式の支那の市語と異り、我が國民が音韻方面に對して敏感な事が分るのでありまして、これは必ずしも商人語のみに限らない。矢張り「應用言語學」から拾つて見ますと、

笏は音コツ（骨）に通ふを忌んで、シヤクといひ、

主尊が、死損また仕損に聞ゆるから、シイソンといひ、

明和九が迷惑となるからとて、明和九年を改めて、安永元年とした。

江戸の火消イロハ組に、四十七組あるべきだが、ヒとへとの組はない。ヒ（火）を忌み、へ（屁）を嫌つたからである。

などの様な普通語又は固有名詞にまでも行はれたのであります。此處に、我が國民に恐らくは獨特な、言語の樣相的

變化の原因が見出されるのであります。これに反して、支那では、當代の皇帝を尊崇する意味から、國字を忌避して或は缺劃し或は他字に變へる等の事が行はれたのは、上にも論及した通り、文字本位たるの面目が躍如としてゐるのを覺えるのであります。

なほ、穗積陳重博士の舊論「タブーの種類として稱呼敬避」を論ぜられてゐる邊は、國語位相論的に見ても興味が深い。「タブーと法律」も參照せられよ。

話は愈々現代に入つて來るのでありますが、現代の商人語の一例として、野田澤軍治氏の著書「財界用語辭書」（大正十三年）を拾ひ上げて見ますと、これは單語の集錄說明をした特殊辭書にすぎないのでありますが、而も矢張り財界といふ一社會位相の言語の一面を捕へたものと言はねばならないでありませう。

今これを一瞥して先づ氣が附くのは、それが、純國語・漢語・西洋語の三種の混合物である點でありまして、現代の一般國語々彙に於ける姿を此處にも反映してゐるといふ事であります。この三種の中漢語・西洋語等の分子を除き、純國語のものに就て觀察を進めて參りますと、その大多數は普通一般の語が、財界用語として特殊な意味を帶びて來つてゐるといふ事が目につくのであります。即ち、前述の「ふる枚まで」「手に千鳥」などの場合とは反對に、特殊な語が一般化したのではなく、普通語が特殊化したものが多いといふ傾向を示してゐる事であります。論述の抽象化を避けるために、その實例を拾ひ上げて見ますと、

煽ル（アオル）（取引用語）大手筋が相場を狂はせる爲無暗に賣買すること。買煽といへば賣方、賣煽といへば買方のことなり。

灰汁拔（アクヌケ）（同）伏在せし惡材料の消盡せしこと。

足（同）單に足といへば、利息の意に用ふ。

足ヲ出ス（同）取引賣買の結果損失金を決濟し得ざること。

足取り（同）足引ともいふ。相場變動の有樣をいひ、上足取りといへば相場の上騰。下足取りと云へば下落を意味す。相場變動の常ならぬことを足取不定といふ。

頭（同）値幅の最高點のこと。即ち五圓幅の四十圓頭といへば、四十圓を最高として。値幅五圓即ち四十圓乃至三十五圓の値幅をいふ。

頭金（同）差金のこと。例へば貸附金と擔保價格との差額の如き、或は賣買値段と帳入値段との差額の如きをいふ。

味（同）取引市場に於ける賣買の景氣。

歩ミ　爲替相場にて歩ミといへば。刻み又はポイントと同意味なり。刻みの項參照。取引用語として歩ミといへば、一立會中賣買値段の推移をいふ。

有ガスレ（同）正米の缺乏せる狀態、即ち天候その他の偶發事件の爲に、米作不作の豫測よりして　農家が賣惜みをなし、一時市場に正米の缺乏を生ずること。

多數の頁を費すのを恐れて、アの部だけを摘出したのでありますが、なほ文雅堂編の「市場用語字彙」（大正十四年）によつて二三を補つて見ますと、

浴ビセル　賣方が買方の買數量よりも多數の賣を注ぐを云ふ。

青田褒メ　稻作の良好なることを唱ふるを云ふ。

當ル　利益を得ること。思惑の適中すること、曲るの反對なり。

跡覺ェ　過ぎ去りし相場念頭を去らずして、賣慕ひ又は買慕ふをいふ。

頭物　優等品のこと（生糸）

などがあります。

これらの個々の單語が、如何なる類推作用によつて特殊化されるかを點檢するのも興味ある作業でありますが、今はそれらを割愛して、全體を綜合して考へますに、純粹の我が國語と雖も、可成り微妙な意味の表現に堪へ得るといふ事でありまして、必ずしも漢語・西洋語を必要としないのみならず、否我が純國語でなくては表現し得ない場合が多いといふ事であります。位相論としては脱線かも知れませんが、外來語彙の使用も多くは流行心理に基くものでありまして、純國語と雖も彫琢を加ふれば、可成りの程度まで外來語を驅逐し得るといふ事が信ぜられるのであります。

八

併しながら、新奇を喜ぶ流行心理は、却つてこの反對に出で、傳統的な舊來の國語よりは、新來の外國語を喜ぶものでありまして、それらの外國語を學ぶ讀書階級といふ言語社會を經て、一般社會に傳播せられる事が多いのであります。今日でも、中學生等が屢英語を濫用し、高等學校生や醫學部學生等がドイツ語をふりまはし、そこに彼等獨特の言語位相を形づくるのでありますが、この事は昔日に於ても同樣であつた筈であり、例へば江戸時代に於ては、當時の蘭學書生がオランダ語をふりまはしつゝ獨特な言語社會を作つた事は想像に難くありません。その一端は、例へば當時の洒落本「女郎買之糠味噌汁」（天明八年）に現はれて居ります。

呑アン。わつちやア、フロウよりウエインがいゝ。おみよさん、一つつぎな。――おつとよし〳〵と、一つのんで、千丈へさす。

（フロウとは女の事、ウエインとは酒の事、いづれもおんらだことばなり。この醫者、おらんだがくとみへたり。）

呑。これ英江さん。わいちやア、ロードゲシクトになりやしたろふれ。ゴロウトにせつなふござへす。もふウエインは止にしてちつとヒスクでも荒しやしよふ。（ロードゲシクトは、かほのあかき事なり。ヒスクは魚なり。いづれも蘭語也。）

呑。そんなら、もふいゝやすめい。あゝ、ウエインわいやだが、スマツカかなんぞ食いたい。

住の。それ、いふまいといゝながら、又いゝなんす。ほんの毛唐人だれ。スマツカとは何の事だへ。

呑。むまいものゝ事さ。

この最後の會話の部分にもあらはれてゐる様に、彼等が如何にそれを振り廻したかゞよく知られるのでありますが、併しこれらの外國語は、たゞ單語として使用されたに過ぎないもので、文法方面には一向その影響は現はれてゐないのであります。

蘭語と共に當時唐音(タウイン)語も一部言語社會に使用された事が伺はれます。矢張り、洒落本の中に「和唐珍解」（天明五年）があり、また更に古く「聖遊廓」（寶暦七年）などはそれの實例を示して居ります。今、聖遊廓に附加した唐音語解説を摘錄して見ますと、次の通りであります。

廓そうじて遊所の事をなんくわんといふ。

女郎を　にいくん　と云　　若衆を　れんつう

娘を　につう　　女を　にいしん

尼な　にいすゐん
仲居な　にいとう
火車な　にいくはん
客な　きや
すいな　そうちん
ぶすいな　ほうちん
つとめな　すいこ
交合な　すてき
寝るな　すん
銀子な　ばんつう
たばこな　ちやうこ
酒な　ちう
吸物な　しゆせん
青な　せた
赤な　めんる
黒な　こう
三味線な　てんきん

亭主な　じうてい
引舟な　にいはん
禿な　ぢよてい
大じんな　くうてき
色な　きん
うそな　へんな
ほれたな　ていら
のいたな　はん
おきるな　とう
金子な　らんつう
きせるな　すとん
肴な　こん
歪な　ちうはん
黄な　ぬく
白な　ほう
歌な　かん
琴な　りきん

こきうな　ちよきん　　尺八な　げん
うつくしいな　ほう　　好いたな　れん
わるいな　しう　　かすんな　けまな
孤さしたな　めんとん　　聞な　ちよん
おさへな　りやん　　助(スケ)るな　ごうてん

これらが唐音語である事は、その音韻上の特質から容易く推定出來るのであります。卽ち、撥音・イ韻・ウ韻が頻出すること、ラ行音・濁子音等が語頭に來てゐるといふ特徵を有するからであります。

以上、本節に述べた所の外來語彙を多く包含する所の國語の一樣相、これは學生語或は學者語とでも唱へるのが宜しいかと思はれますが、この樣な學者語は更に遡つて古い時代にも見出されます。彼の源氏物語帚木の卷に見える學殖深い博士の娘が、しきりに漢語を振廻すなどは、恰好の一例であります。卽ち、

聲もはやりかにていふやう、月ごろ風病おもきに堪へかねて、極熱の草藥を服していと臭きによりなむ、え對面たまはらぬ、まのあたりならずともさるべからむ雑事らは承らむ、といとあはれにうべ〳〵しういひ侍り。

九

この樣な學者語に含まれる外來語は、一般人には理解せられないのが普通でありまして、そのためまた普通人に理解せられないのを得策とする言語社會に於て、特に使用せられるといふ心理的根據を見出すのであります。醫者の言

語社會に於て、特にドイツ語を振りまはすのは、單に修得した外國語を濫用するといふ學生心理からばかりは說明せられず、病名その他の術語を患者その他の一般人に知られまいとする意圖が作用してゐる事を考慮に入れなければならないのであります。

前節に擧げた唐音語が遊廓に出入する通人語として流行するに至つたのも、恐らくはこれに似寄つた、一般人からは知られまいとする心理に基いて生れたものでありませう。馬琴の兎園小說の隱語の終末の部分に、

柳里恭の獨寢といふ隨筆に、女郎屋町にて、こよなうはかない客じや、あさき客じやなどいひて、物がたるに、唐音にて云ひたきものなり。といひしなり。長崎にては、肉にうとし、此ごろはこちのおもはくに、何しにやら、すつきりおとづれさへなく、さりとは、謹恭ごんにやくしんとがりじややうひやうらどないはなしにて、すゐとて體けりとぞ。その次に皆さまがた、客の前にて用ひ給うて、よき唐音のかたはし記してこゝにいふ。

嫖子、　けいせいのことなり。
面的不好、　これはきつ顏もばせのわるいとなり、
看々（カンカン）、　あれ見よといふこと、
拿茶來（ナツサウライ）、　茶をもてこいと云ふこと、
酒兒（ツエンウ）、　酒の事、
老臉皮（ラツケンピ）、　つらのかはの厚いこと、
未曾去（ウイツアンチエイ）、　まだかへらぬといふこと、

などを記されし。

らであります。今、挾語（一名唐言）の正體を示すために、辰巳之園にのせた記述をそのまゝ引用すると、

右（通言）の類、專に用る外に、唐言（カラコト）と名付て、五音を以て云事、人の知る所なれど、爰にあらわす。

アカサタナハマヤラワ　此通りへ　カ

イキシチ－ヒミヰリイ　此通　へ　キ

ウクスツヌフムユルウ　此通りへ　ク

エケセテネヘメエレヱ　此通りへ　ケ

ヲコソトノホモヨロオ　此通りへ　コ

右の如く、カキクケコト五音の字を付云也　譬は、客（キャク）と云時に、キキヤカクク、又おんななどとはれる時は付字にてはれる也。女はオコンナとオの字へつくコの字をはれる也。清濁は本字に直に濁る也。此外に、ノ付、さ付、などと云て、其時におうじて一字置に付る也。知れざる事を云時、はやく此事を考べし。又此通し言葉も口付て云時は、いかやうにもはやくいわるゝ也。諸人知る所なれども、知らざるもののゝ便にと爰にあらわす。

而も、この實例は「辰巳之園」には勿論、安永四年刊の黄表紙「金々先生榮華夢」等にも現はれてゐる。この挾語も通人語の一種であつた事は、「通し言葉」といひ、「諸人知る所なれども」と言つてあるのでも明かであるが、高木氏の引證された通り、遊里を中心として流行したらしいのを以てしても伺はれる。而も注目すべき事は、一般人には知らせない爲に、特に一音毎にカキクケコの何れか一音を挿入するといふ技巧を弄する事は、全く他に類例を見ない珍らしい方法であつて、通人語を特色づける一特徴として看過し得ないものであります。なほ、この挾

語の起源に就ては、「嬉遊笑覽」に「このこと寶暦末頃より始りしにや」とあるのが、最も確實に近いと見るべきでありませう。而してそれは高木氏によれば、花柳界などでごく最近まで行はれてゐたとの事であります。（前掲論文參照）

一〇

通人語に對立して、それに關係の深いものは遊女語、即ち「廓言葉」「柳巷語言」と唱へられる花柳社會の言葉であり、遊女階級の言葉であります。春江溪氏も、前節に引用した樣に、通人社會の語に續けて、花柳社會の語を擧げてゐられるのもこの爲でありませう。而して、この遊女語に就ては、幸にも、文法方面に松川弘太郎氏の「廓語考」（江戸往來特輯二卷五號、昭和三年十二月）があり、語彙方面に宮武外骨氏の「アリンス國辭彙」（昭和四年五月、松川氏の廓語考も附載）がありまして、相當研究の進んでゐる事を報じ得るのは愉快であります。

遊女語の音韻に就ては、特に普通語と隔りのある事を見ないのであり、語彙に關しては前述の通り、宮武外骨氏の研究がある譯でありますが、これは主として川柳の解釋であり、川柳と遊女語との密接な關係を思へば、同じく外骨氏の「川柳語彙」（大正十二年十一月）、草薙金四郎氏の「川柳辭典」（昭和六年三月）等も有力な參考書ではありますけれども、未だ純粹な遊女語彙は出來上つてゐないのであります。

併し、遊女語としてその特色が發揮せられてゐるのは、文法方面でありますから、此處では特にこの方面だけを觀察して見る事に致しませう。

遊女語の體言で、その特色の見られるのは代名詞であります。遊女の別稱をオイランと唱へるのは、吉原者が主拔

をオイラサマと唱へたのに起因するとの說がありますが、これによれば遊女の自稱はオイラであつたかと思はれるのでありますが、喜三二作「柳巷訛言」(天明六年)には、僅かに一例で、

姉女郎見て、「馬鹿らしい、やめなんし。オイラはきついきらひだよ」

と、朋輩に對して用ゐてゐる例があるだけで、多くの場合、自稱は「ワッチ」を使つて居ります。例へば、同書に、

あれ見なんし。ワッチが一念で火が青くなりいした。

ワッチラも參りんせう。

ワッチヤア餉の顏が見たい。

併し、他の書物には　ワタクシ・ワタシ、ワチキ、オレ等も見える「柳巷訛言」の序文によると、扇樓(アフギヤ)では特に自稱にワタクシを用ゐたらしい。

遊女が用ゐた對稱代名詞は殆んど皆ヌシであつて、その多數を示す場合はヌシタチ、ヌシガタとなつてゐるのは、女郎は客に對するものであり、客を主(ヌシ)と見る所から轉じたものである事は明かであります。その實例は、

この一念では、ヌシが頭痛でもしなんせう。

ヌシタチ聞いてくんなんし。

ヌシガタの知りなんした通りの客衆だから、どうも仕打がいつそ氣がもめんした。

馬琴の兎園小說も、既にこれに氣附いて「また遊女の隱語あり。ぬしとは客人を始め敬する人をいふ」と、遊女語の筆頭に擧げてあります。併し、「柳巷訛言」の序文によると、扇樓(アフギヤ)の自稱ワタクシに對し、玉館(タマヤ)の對稱はオマヘサマ

であつたといふから、必ずしも常にヌシであつたとは言へない次第です。

遊女語の最も顕著な特徴があらはれる場合は、動詞に複語尾が結合した場合の音韻轉訛で、用言でも形容詞の場合には、文法上何等の特異性をも示さない、形容詞に關して強ひて擧げるならば、「馬鹿らしい」の單語が濫用せられた事であらう。川柳に、

馬鹿らしい月夜鴉でざんすにな。

馬鹿らしい狸は古い起きなんし。

待ちなんし羽織の襟が馬鹿らしい。

馬鹿らしうありんす國の面白さ。

遊女語の動詞の音韻轉訛に於ける最も著しい現象は、マが撥音化してンとなる事で、アリマスはアリンス、ゴザリマスはゴザリンス、致シマスは致シンス等と化し、なさいますの系統のナマスもナンスと化すのであります。この特徴を捕へた川柳に、「領域はは゛ねられるだけは゛ねるなり」といふのがあり、遊廓を稱して「アリンス國」と唱へるのも、此處に由來するのであります。今二三實例を擧げて見ると、

此事がありんす、いつそ[illegible]ざんす。

足袋屋さんにかりに借りがありんせん。

おありがたうござんすが、わつちやア饅は七つ目でありんすから、おゆるしなんし。

うんと云ひなんせんと抓りんすにえ。

ひもじうはおざんせなんだかえ。

[illegible]

さうしてもようざんせうかれへ。

音韻轉訛の次に著しいのは、この撥ねる音が更にイ韻に轉ずる事で、アリンスはアリイスに、ゴザリンスはゴザリイスに、致シンスは致シイスに、ナサリンスはナサリイスに化するのであります。川柳の「北國なまり、どうしいすかうしいす」は、この第二の特徴を捕へたもので、第一第二の兩者を併せ唱へたのは「りんす・しいすは北狄の言葉なり」の川柳でありませう。實例を擧げると、

月の枕言葉苦勞でありいす。

さつきから見てゐんすが、富士はなんともありいせん。

おやかましうござりいした。

たしか芋に油揚でござりいすよ。

月前の雪難題でおざりいす。

質の利は知りいせんとは云はれまい。

白無垢で兎角寒氣がしいす也。

ほんに侍になりたくてなりいせん。

遊女語に於ける動詞音韻轉訛の第三の特徴は、母韻aが母韻eに移る事で、例へば、ゴザリンス・ゴザリイスがゴゼリンス・ゴゼリイスとなり、オザンス・オザイスがオゼンス・オゼイスとなり、ナンスがネンスとなる樣な轉訛を行ふのであります。その實例は、

イ、エもふ同じ事でごぜんす。

どうせ父お馴染程ゐへ事　ごせんせんのす。

ねかし出すこつちやァごぜいしない。

サア重野さん、ようおぜいすよ。

ヲヤけしかられへ、今にお出なせいす。

そんなら休みなせんし。

たしか前にこつちへ来れんしたかイ。

お遊びれんしておくれれんし。

遊女語の動詞に於ける轉訛乃至脱落は他にもありますが、主なものは以上の三種でありませう「ます」に當る所を「やす」と言ひ、「あります」の意味を「おす」で表はす事もありますが、これは恐らく關西方言（現今でも行はれてゐる）が輸入されたものと見るべきであらうと考へられます。例へば、

此茶杓は此頃買ひやした。

此中もこつちに平の蓋がござりやした。

おすざんす共通人の寢言なり。

七月下旬あたでおすからでおす。

十年はおつす九年にはつすなり。

あれさもうその名代ぢやおつせんよ。

遊女語の副詞にも文法上の特異性は認められないが、單語として「いつそ」がよく用ゐられて居り、助詞に於ても

「え」「さ」「ね」等が頻繁に用ゐられ、中でも「え」の如きは最も特徴ある情緒的な表現である。これに就て[illegible]は「廓語考」には「必ず言葉の初めに不定稱の代名詞何といふ意味の値せらるゝ場合にのみ用ゐられる」と言はれたのは、當らない。今次にその實例を擧げて見る事にしませう。

もしえ、もの字も樣とよむかえ。

高慢に馬にのつて歩きんすにえ。

いつそ面白うありんしたは、馬が二人づれで駈けんしたえ。

なにをやめんすのだえ。

人に云ひなんすなえ。

もしえ、昔はどこにゐるえ。

もし、おいらんえ。

以上、遊女語の文法方面の要所を指摘して見たのでありますが、最も特徴ある部分は何と言つても、音韻に於ける音韻轉訛でありませう。而も、それが第一に撥音化であり、第二にイ韻化であるといふ傾向を示してゐるのに、平安朝期の國語が音便現象を引き起したのと類似してゐるのでありまして、恐らくは當時流行の唐音の感化を受けたものではないでせうか。通人語に於て唐音語が流行したのと考へ合はすべきでありませう。

併し、この遊女語にも自ら變遷があつて、第一の撥音化が最も早く行はれ、「淺草繁昌記」の記述によると、

この言葉、明和安永頃に至りて殆ど確定したり。その變遷は、語尾の「ます」なる「いす」に轉じ、「御座ります」を「ござんす」「おざんす」又はかはりて「おぜんす」とも云ひ、「なさりませ」は「なさんせ」となり、轉じて「なんし」となる。文化

以降には、ざんす、ざいす、ざります、おつす、だす、ますいす、などと變化したりと云ふ。

とあります。が、この時代的變遷の外に、家風の相違と言つた變化もあつたと見え、天明三年（1783）の「[illegible]」の序文には「所謂丁字のオザンス、松葉のオッス、扇屋のワタクシ、玉屋のオマヘサマ」とあり、文化の俗諺には「ワタクシ扇屋、オツタカ玉屋、ザンス丁字屋、オス松葉屋」といつてゐる次第であります。

この遊女語法、明治時代に入ると漸く衰亡に歸したものの如く、森三溪氏の明治十六年に於ける記述には「當今ニ至テ漸々消滅スルガ如シ、然レドモ俚諺中ニ用フルコトハ猶止マズ」とあります。反對に、その勃興した時代を考へると、江戸時代の初期に上るらしく、宮武外骨氏は寶暦の末年からと定められたのは遊女語を吉原詞に限つたからでありまして、これに島原詞をも含めるならば「淺草鑑古記」に元禄頃よりの事としたのも甚だ新らしきに過ぎ、寛文初年（1661頃）刊の「浮世物語」に於て、早くも

かれ（傾城）ら忘れかね、行きて逢ひければ、谷の戸いづる鶯の、初音おぼろの聲を出し、又きさんしたか、早ういなんしなどいへば、此言葉の有難さ、如何なる和尚の一句提撕の示しも、これには優りと思はれ（中略）、その外これへきいんなといへば、箱のごとくなる御手にて差し出し給ひて、一つのまんしといはれたるは、あつたものではないと、浮かれ／＼てまどひ果つる。

とあり、既に撥音頻出の萌芽を示してゐるのであります、

遊女語の上述の樣な特色が、艶麗な調子を持つものとすれば、それは地域的に見て、先づ島原に始つたものであり、後東漸して江戸吉原の詞となつた事は、喜多村信節の「嬉遊笑覽」にも指摘してある通りであります　實際島原詞に於ても

だ「東園小說別集」にのせた吉原詞を見ても、

呼んでこいといふ事な、	よんできろ、
急げな、	はやくうつぱしろ、
いでくるな、	いつこよ、
ありくな、	あよびやれ、
こぼすな、	ぶつこぼす、
わるいと云ふことな、	けちなこと、
そうせよな、	こうしろ
あそばるゝな、	うなさるゝ、
腹の痛むな、	むしがいたい、
しやんなな、	よしやれ、
こそばいな、	こそつぱい、

とあつて・全く當時江戸にはびこつてゐた俠客博徒の六方詞を遊女が模倣して居た(「アリンス國辭彙」九頁參照)事が分り、川柳にも

美しい顏して俠骨なものをいひ

と皮肉つてあるのでありますが、後に島原詞を採り入れて、美しい顏に適はしい美しい詞が行はれるに至つたのであ

りませう。

この遊女語成立の心理的基礎に關しては、「淺草繁昌記」に、

客に貴賤上下の區別多き此里にて、世間普通の言語を用ふる時は、或は不都合の起るべきを憂ひ、特殊の言葉によりて、すべてを平等に取扱ふ事に意を用ゐたる也。

と云ひ、また「北女閭起原」に、

爰なる里言葉は、いかなる遠國より來れる女にても、此詞をつかふ時は、鄙のなまり拔けて、古くより居慣れたる遊女と同じやうに聞ゆるなり。されば、此意味を考へて云ひ習はせし事なりとぞ。

と言つてあるのが、大體に於て當を得たものであらうと思はれます。卽ち、遊女といふ社會的位相がこれに適應した遊女語なる言語位相を產み出すに至つたのであります。

二

遊女語に於ても、この樣に美しさを見出す事は出來るのでありますけれども、それは下卑た美しさであり、眞の美しさ優雅な美しさは、女房詞に於て見出されなければならない筈であります。それ故、本節に於ては、女房詞、或は女中言葉と言はれるものを觀察して見る事に致しませう。これに就ては拙稿「婦人の言葉の特徴について」（「國語教育」十四卷三號、昭和四年三月）に論及しておきましたから、參照せられん事を望みます。

女房詞が文獻に見える最も古いものは、惠命院僧正宣守が應永二十七年（一四二〇）に書いた「海人藻芥」（「群書類從」

卷四九二）でありまして、その記載は次の通りであります。

内裏仙洞ニハ、一切ノ食物ニ異名ヲ付テ被ㇾ召事也。一向不ㇾ存知ㇾ者當坐ニ迷惑スベキ者哉。
飯ヲバ供御、酒ハ九獻、餅ハカチン、味噌ヲハムシ、鹽ハシロモノ、豆腐ハカベ、索麪ハホソモノ、松茸ハマツ、鯉ハコモジ
鮒ハフモジ、鶴ハツモジニハ不ㇾ備也、但ツゲミヲ供御ツクツクシハツク、蕨ハワラ、葱ハウツボ、如ㇾ此異名ヲ被ㇾ付。
近比ハ將軍家ニモ、女房達皆異名ヲ申スト云々。御菜ヲバヲメグリト云、當ニヲマハリト云ハワロシ。楊原ノバスイハ、引合
フバヒキト申也。

この記述によつて見れば、女房詞の起源は畏れ多くも内裏仙洞にあり、將軍家の女房達に及び、後次第に大名の奥方に、更に一般良家の家庭にと擴大普及せられて現代に及び、例へば明治三十三年刊の「女子手紙の文」、大正十二年刊の沙密女史著「實用女子書翰文」等にもこれが見えるのであります。

前掲の著に續いて古く、且つ相當語彙を集錄したものには、足利義政時代（一四四九―一四七三）の大上﨟の名を記した「大上﨟御名之事」（「群書類從」卷四一四）があります。これに收めた女房ことばは約百でありますが、江戸時代の寫本になると四五百の多きに達して居り、一例として、根井新兵衛の「女中言葉」（正德二年）、筆者不明の「女房かたの言葉のこと」（女房樣書に收む）、「女言葉」（諸體叢に收む）、「女敎訓千代の鶴」（弘化二年）などが擧げられます。

女房言葉に關しては、この樣に豐富な語彙が得られるのでありますが、音韻乃至文法方面に於ては普通語とは特に異つたものを見ないのであります。それ故、こゝには語彙だけに就て觀察を進めて行きますと、前記の拙稿「婦人の言葉の特徵に就て」に於て指摘した樣に、次の四ケ條の特色を發揮してゐる事が知られるのであります。

（一）丁寧な言葉遣をすること
（二）奇麗な上品な言葉を用ひること
（三）婉曲な言ひ方をすること
（四）ぎごちない漢語を避けること

以下、この各條に就て點検して見ませう。

第一に、丁寧な言葉遣をする事は、形の上に現はれては、敬意の接頭辭「お」をつけるのであります。これは今日の婦人の間にもよく行はれてゐて、顔をお顔、談話をお話、手紙をお手紙、芝居をお芝居の類で、枚擧にいとまがありません。たゞこの様に「お」をつけると、單語がそれだけ長たらしくなるので、場合によつては之を短縮するため、語尾を省略する事があります。例へば、

なすび——おなす　　なます——おなま
かぶら——おかぶ　　かつを——おかつ
かまぼこ——おかま　　さしみ——おさし
はまぐり——おはま　　みやげ——おみや
やきもち——おやき　　田がく——おでん
こはめし——おこは　　薩摩芋——おさつ

更に丁寧なのは、接尾辭「さん」を附け、なほその上に接頭辭「お」を附加する事で、而もこれが以前よりも現今の

口語に於て盛んなのは注目すべきであります。卽ち、關西地方では、現に、

豆な　豆さん
卵な　たまさん
芋な　お芋さん
粥な　おかいさん

と唱へてゐるのであります。（加茂正一著「ロゴスの歎き」大正十四年二月參照）

又、面白いのは、接頭辭としては更に丁寧な「おみ」が、母韻又はハ行音の前に保持されてゐる事でありまして、これは英語の不定冠詞 a に對する an の様な關係にあるかと思はれます。卽ち、

あし（足）　おみあし
おび（帶）　おみおび
あふぎ（扇）　おみあふぎ
あかし（燈）　おみあかし
はぐろ　おみはぐろ

而も、この點で最も面白いのは、「汁」のことを「おつけ」といふが、これに更に接頭辭おみが重加されて「おみおつけ」となるといふ如何にもおんご丁寧な言葉遣の存する事であります。

この様に丁寧な言ひ方をすれば、それは同時に奇麗な上品な感じを與へる事になるのでありますが、更に一歩を進

て、言葉そのものを適當にえらぶ事によつて、第二の條項たる奇麗な上品なものたらしめるといふ目的を達し得るものがあります。たとへば、卑近な例ではありますが、尻をお尻と言へば丁寧でもあり奇麗でもありますが、尻を、お尻と言つたのでは、丁寧ではあつても奇麗な上品なといふ感じを起さない。もし、これを言ひ換へて「おたい」と唱へると、初めて奇麗な上品なといふ感じを起させるのであります。この様にして、普通の語を言ひかへる時に、女房詞の多數の實例が見出されるのでありますが、その方法には、或はその物の特徴を捕へ、或はたやすく聯想し得るものをえらび、或は古い時代の言葉を活用する等、色々な原理をはたらかせてゐる事が分ります。

そこで、この様に奇麗な上品な言葉を用ゐる第一の場合として、その物の性状をとり、特徴を捕へたと思はれるものの實例を擧げて見ますと、

あづき（小豆）　おあか、色のまる
さけ（鮭）　あかおなま
がん（雁）　くろおとり
みづ（水）　おひやし、おつめた
ひやしる　つめたおしる
かます（梭魚）　くちぼそ
するめ（鯣）　よこがみ
かれひ（鰈）　かため
いわし（鰯）　おむら、むらさき
はも（鱧）　ながいおなま
きじ（雉）　しろおとり
ひやむぎ　つめたいぞろ
御茶　おまはり、おめぐり
きね（杵）　なかぼそ
かなわ（金輪）　三あし
ちしや（萵苣）　はびろ

ねぎ　（葱）　しろね、うつぼ

これ等の類で、單語の外形上に特徴のあるものがあります。それは、その性狀をあらはす言葉につゞけて「もの」を附加したのでたとへば、

いりこ、鍋	くろもの	鹽、豆腐	しろもの
大根	からもの	小豆	あまもの
蒜、葱	くさもの	なます	つめたもの
ゑひ	かゞみもの	そうめん	おほそもの
うんどん	あつもの、おながもの	梅干	おしわもの
夜着	よるのもの	大根漬	かうのもの
ぶり（鰤）	なつのもの	月水	つきのもの

また、たやすく聯想し得るものを用ゐた例としては、次の様なものがあります。

饅頭	しらたま	そうめん	しらいと
かまぼこ	おいた	豆腐	おかべ
のしあはび	つぼみ	さゞえ	おこぶし
すし	つきよ	ぼたもち	よふね

このたやすく聯想し得るものの中には、枕詞や古語があります。枕詞を用ゐた例には、

いやしきこと　つたなし　　めづらしき　めづらか

また、動詞の實例は、

ささふ　いざなふ　　人を呼ふ　めす

物を食ふ　めしあがる　　人あつまる事　つどふ

人をもどく事　さかしがり

これに接頭辭「お」のついたものには

腹立の事　おいきまき　　雨ふる事　おしめり

歩くこと　おひろひ　　ねること　おしづまる、およるなる

起ること　おひるなる　　泣くこと　おむつかる

大小用のこと　おとゝにゆく

以上の様に、奇麗に上品に言ふことは、結局、女らしさを表はすため、優美といふ特色を最もはつきりと現はしたものでありますが、女房詞には、第三の手段として、言葉の一部を省き、または隱して、その言葉を婉曲にしようとする場合もあります。これも、矢張り、優美を表はす一つの方法でありませう。

先づ、言葉の一部を省略した例をあげて見ますと、

ごぼう（午蒡）　ごん　　ささげ　さゝ

たけのこ　たけ　　まつたけ　まつ

くゝだち	くゝ	じゆくし	じゆく
こんにやく	にやく	つくつくし	つく
わらび	わら	ちまき	まき

また、かうした省略語を重ねた言ひ方のものもありますが、これは兒童語の場合に似通つた方法であるとも見られます。即ち、

あづき（小豆）	あか〳〵	あさづけ	あさ〳〵
だんご	いし〳〵	いりまめ	いり〳〵
やきもの	うき〳〵	香の物	かう〳〵
かつを	から〳〵	數の子	かず〳〵
うす（臼）	つく〳〵	するめ	する〳〵
ほしうり	ほり〳〵	よしの紙	やわ〳〵
あへ物	みそ〳〵		

次に、言葉の一部を隠した言ひ方は、女房言葉として最も特徴ある婉曲な表現方法でありまして、多くの例は、その最初の一音、假名で書けば初の一字をとり、それに「もじ」なる接尾語を副へたものであります。從つて、この特徴を捕へて、女房詞を「もじ言葉」と唱へる事もある譯であります。その例は、

いか――いもじ	えび――えもじ
おび――おもじ	かみ（髮）――かもじ

くき漬――くもじ　　こひ（鯉）――こもじ
砂糖――さもじ　　すし――すもじ
粗末――そもじ　　たこ（鮹）――たもじ
つぐみ――つもじ　　ねぎ――ねもじ
のり（海苔）――のもじ　　ふな――ふもじ
ゆぐ――ゆもじ　　父（おとうさん）――ともじ
母（おかあさん）――かもじ　　お内儀様――うもじ

稀には、漢字の一字を取つて、二音に亙る事もあるが、多くは單音或は拗音の場合であります。例へば、

せんじ茶　せんもじ　　心配　しんもじ
先日　せんもじ　　えそ（鱛）　こんもじ
息災　御そくもじ　　しやくし　しやもじ

この樣に、もじ言葉が流行るにつけては、次の樣に成立の狀態に方法を變へたものもあらはれる樣になりました。

ひる　くさもじ　　き（葱）　ひともじ
にら　ふたもじ

これは、「ひる」は臭い所から「くさもじ」、き（葱）は假名の一字であるから「ひともじ」にらは假名の二字であるから「ふたもじ」と唱へたのであります。和歌を「みそひともじ」といふのは、普通語でありますが、その成立の原理は全くこれと同一であります。

以上は指名詞の例でありますが、このもじ言葉は代名詞にも及び、

わがみ　な　　わもじ

そなた　な　　そもじ

といふ様な例も現はれ、形容詞や動詞には、

きのどく　な　　おきもじ

はづかし　な　　おはもじ

お目にかゝるな　おめもじ

いそがしい　な　いそもじ

などの語も行はれるに至りました。普通語として用ゐられてゐる「ひもじい」の如きも「ひだるし」から轉じた女房詞なのではないでせうか。

女房詞の第四の特色は、ぎごちない漢語を避けたといふ點にあります。女房詞の全語彙を見渡しても、漢語は僅々數例であり、しかもそれらは古來慣用せられたものの名殘りでありまして、

飯な　　くご（供御）　　　　　　酒な　くこん（九献）

書物な　草子　　　　　　　　　狀な　せうそこ（消息）

精進な　おせちみ　　　　　　　紙な　れうし（料紙）

文庫な　れうしばこ

などに過ぎません

漢語を大和言葉に言ひかへた例には、

奉公	みやづかへ	返事	いらへ
金子	こがね	銀子	しろがね
返禮	むくひ	移轉	わたまし
天氣	ひより	料	しろ
茶	このめ	葡萄	えびかづら

この様に女房詞が漢語を避けるためには、漢字の字形の一部によつてよみ、或は直譯的な大和言葉におき換へるなど、苦心の跡の見られるものもありまして、

鱈を	ゆき、ゆきのした	蛤を	おあはせ
珠數（念珠）	おもひのたま	精進を	きよまゐり
鮎（年魚）を	としうを	澤山を	さはやま

この様に見て來ると、女房詞に漢語が全く無いと言はれないのでありますが、努めてそれを避けてやさしい日本語を用ゐようとした事が分り、少くともぎごちない感じのする漢語をば女房が好んで用ゐたといふ形跡は全くないのであります。

かくして、上述した所を要約すれば、女房詞は、或は丁寧に、或は綺麗に上品に、或は婉曲に、或は漢語を避けて

やさしい響の國語をえらぶ等、種々の手段を用ゐて、婦人が理想とする所の優美といふ特色を發揮し、それによつて女らしさを保つて行かうとしたものであるといふ事が出來ます。かくして女房階級といふ一つの社會位相に應じて、それに適合した言語樣相の發達し來つた事を知るのであります。

二

女房詞の優雅なのに對立して、男子の勇壯な趣を發揮したものは武士詞。その中でも特に目醒しいのは陣中に用ひる陣中詞でありませう。そこで、今度はこの武士詞、特に陣中詞を取出して考へて見る事に致しませう。この武士詞に關するものとしては、春日政治氏の論文「鎌倉時代の武士詞」（「鎌倉時代の研究」大正十四年十月）があり、陣中詞に關する材料は、東北帝大狩野文庫に、寫本として「軍詞乾坤の傳記」「陣中言語集」「軍書」（陣詞狀之拔書）「兵法神武雄備集」（武備第八物見詞の事　武備第十四戰場において詞の事）などの文獻がありますから、これらに由つてその大要を描いて見ようと存じます。

武士詞の由來は、平安朝時代の末、所謂院政の世となり、武士が次第に常上に勢力を張るに至つた頃から、社會的に認められる樣になつたのでありますから、可成り古いものと言はねばなりません。鎌倉時代の語法の如きは、平安朝の語法を武士詞によつて影響せしめて成立したものと言つても差支ないかと思はれるのであります。而して、それは鎌倉室町を經て江戸時代までも持續されたものでありますが、徳川三百年の太平に伴れて漸次ほろび去るに至つたものでありませう。

先づ武士詞に於ける音韻の方面を觀察しますと、音便が著しく使用せられるといふ特色を見出します。武士の訛りと言はれるものの大部分はこの音便でありまして、春日氏は「當時の堂上方が之に對したならば、必ずや甚だしく鄙俗に感じたことだらうと思ふ」と批評せられて居ります。正にその通りで、音便の中でも特に耳立つて感じるのは促音便と撥音便とであります。

この促音も撥音も、共に言語に元氣な活潑な感じを與へるものでありますが、とりわけ促音は剛強な點を添へると思はれます。平家物語の延慶本には、ハ行四段動詞の促音便は未だ見えてゐないのでありますが、後にはこれも發生しますし、當時已に「もつて」「立つたり」「賜はつて」「かけよつたり」等のタ行四段・ラ行四段は殆んど促音便になつて居ります。この促音便は擬聲語（副詞）に特に著しくあらはれて、例へば

川へざつぶと入りにけり。

ひいふつと射切つたり。

どつと笑ふ。鬨をどつと作る。

はつと笑ひなどしけり。

などが頻りに見えるのであります。この他、促音便は、動詞以外の場合にも現はれて、

ねつたい、さらば景季も竊むべかりけるものを。

につくい馬の長くらひかな。

あつぱれ荒涼の申様かな。

今井四郎兼平おつかゝりゝゝよつぴいて、しや首のほれなひやうはつと射て。

何れもよく武士の剛猛さを表はしてゐる事が分ります。

撥音が頻出する事も、武士詞の特徴であるし、また鎌倉時代の特徴とも言へるのであります。ナ行・マ行・ラ行四段動詞の撥音便は殊に盛んに用ゐられ、時には撥音の挿入さへもあつて、例へば、

去んぬる康保四年十一月一日。

風客な好んしかば

主殿司に預けおき候ひをはんぬ。

聴て逐電してんげり。

拗音と濁音の様な、平安朝時代には俗語にある音として排斥された音も、鎌倉時代の武士詞にあつては頻に用ゐられ、拗音は殊に罵言の詞に多く、

しや　しやつ　きやつ

などが是であり、擬声語にも見えて、

ちやうとにらまへ

ひやうと放つ。

などの例があります。春日氏はこれを「拗音の閉ぢある強さに比して、尖鋭利さを有つものである」と説いてゐられる。

濁音が著しく多く用ゐられた事も、例の擬聲語の場合に見られますが、

目へ、さつぷと入りにけり。

むずと組んで、どうと落ち。

ぱつと押寄す。

馬より舟にがばと飛乗らうに。

また、文法上の複語尾・助詞などの類にも、當時の武士詞として、濁音化したものが多く見られ、

切上らんずる者。如何あらんずらん。

存ずる旨があれば。

其は義仲が精進合子で候ぞ。

今般にて多し。

などの實例があります　春日氏はこれを「濁音は、淸音の精細といふ感じに對して、粗大の感じを伴ふことはたしかである」と せられた。何れにしても、音韻方面に現はれた特徴だけから言つても、武士詞の特色は顯著なものがあります。

武士詞の語彙に於て、第一に感ずるのは、漢語を多く含んでゐる事でありますが、これは女房詞に對して言ひ得る事で、學殖の豐かな公家や僧侶達の詞に比べると頗る貧弱であつたとも言ひ得るであらう。併し、前述の音韻上に於ける武士詞の特徴は、悉く漢語に於ける音韻上の特徴に合致してゐる事は、興味ある事實と言はねばならない而も、

この武士詞の特色が剛强な勇壮な所にあるとするならば、それの最もよく發揮せられたのは、武士が戰時に於て用ゐた所の陣中詞である。そこで、以下少しく特に陣中詞に就て、觀察を進めませう。

陣中詞は、武士の戰場に於ける言葉遣を規定したものであるだけに、軍陣の配置、戰場の駆引等に關する術語は、頗る精細になつてゐて、通俗には同様に考へられるものが、嚴密に區別を立てられてゐる。例へば、

一夜陣ならば陣場と云、五日とも居る所ならば陣所と云、打立て行中ならば陣中と云、家に陣を取な宿陣と云也。宿に陣を取ならば宿陣と云也・野外に別て小屋をかけたるを野陣と云なり。

などは、陣に關するものであり、夜討に關しても三種の區別があり、

夜軍ト云ハ、味方惣軍夜ニ入テ戰爭マツルヲ言、タガヒニ大將アリ。
夜討トハ、一備二備ニテモ夜中ヒソカニ押寄討ヲ云、大將ハ不往ナリ。
夜込ト云ハ、夜中ニ敵地ヘ押込ミ火放等ヲ用ヒ又用ヰトモスルヲ云ナリ。

と説明して居り、また食事をするにも、

人數押ノ時、中途ニテ喰ヲ中喰ト云、前陣前ニ喰ヲ惣喰ト云ナリ。陣屋ニテ身拵シ物ヲ喰フヲ支度ト云也。

などと、言葉を違ひ分けた事が分る

陣中詞に關して位相論上の興味をひくものは、併し、この様な術語の細分ではなくて、「軍詞乾坤之傳記」にも見える様に、

凡軍詞ノ作法タルヤ、味方ヲ語ルニハ強ク、敵方ヲ語ルニハ弱ク言フ。出陣並ニ陣取等ノ時、本書ノ通也。

とある趣旨、この武士の敵愾心が言葉の上に如何樣に反映せられてゐるかといふ點であります。この點に就て、以下に觀察を進める事に致しませう。

陣中詞に見える敵愾心の表現は、主として動詞にあらはれてゐるのでありますが、體言たる名詞にも存在しないではありません。例へば、

祝言の時は、蚫斗なば打蚫と云、栗なば勝栗と云、昆布なばよろこぶといふ也。
味方の人数なば打かずと云、敵の人数なばかずといふ。敵には打といふ詞いるべからず。
味方の人数なば幾手に備たると云、敵の人数なば幾きれに備たると云べし。
敵方馬煙ト云、味方ナバ馬ボコリト言ナリ。（馬煙ハ敗振ニ通ヘバ也。）

などの實例に就て見ても、「うつ」とか「かつ」とか景氣のよい言葉を味方に用ひ、「まけ」「きれ」等の不景氣な詞は敵方に使ひ、「物見詞の事」（兵法神武雄備集）にも明かに、「惣て味方には引と云言葉を不用、敵には打と云言を不用なり」と說明してある通り、言葉の端々にも味方の士氣を鼓舞し敵勢を吞むといふ意氣込を示すべき意圖が伺はれるのであります。

これは陣中詞の語彙には見えないのではありますが、代名詞に於て、普通の場合には、「和殿」「御邊」といふ丁寧な言葉遣をする武士が、喧嘩づくになり敵方に對するとなると、「きやつ」「しやつ」「おのれ」「うれ」を用ゐ、名詞にも「やつ」、接辭に「め」「しや」を用ゐるのは、同樣、敵愾心の高揚から來るものでありませう。例へば、

あな憎や。當家傾けうとする謀反のやつがなれる姿よ。しやつ爰へ引寄せよ。

きやつばらはこはい御敵で候。

いざうれ、さらばおのれ等死出の山の共せよ。

にくい入道めが何事をか奏聞すべかんなるぞ。

しや面をむずノ＼とぞ踏まれける。

陣中詞に見られる敵愾心は、動詞の場合に於て最も顯著にあらはれてゐるのであります。續群書類從卷六八六「伊勢兵庫守貞宗記」を見ますと、幕を張る場合に就ては、

幕の言はの事。出陣の時ははると云、責よせ候時はうつと云。歸陣の時は引と云、又舟中にてはにしらかす、くわんちやういたうしやうなどにては引かこむなど申候。

とあつて、頗る繁文縟禮の感じがするのでありますが、陣中詞の記述を見ればその眞意が判明するのであります。例へば「陣詞抄之抜書」を繙くと、

味方の幕をば打と云、敵の幕をば引と云、舟の幕をばにしらかすと云也。軍鑑に向て大将の御幕いかんと尋に、御幕はうたせて候とこたへば、只今陣場を取出て敵の方へ進み出ると可心得、御幕をば張て候とこたへは、其儘陣を取かため陣がへ無しと可心得。

といふ説明が施してあります。

以下、一々の説明は省略致しますが、陣中詞の次の様な實例を見れば、容易くかゝる言語模相の發生理由を了解する事が出來るでありませう。

主人ノ馬ヲヒイテ參ルト不言、討捕キタリ。御馬ヲ進セテ參レ、御馬ヲ歩セサセナド云べシ。

馬ノイバフ、イナナクト云ベカラズ、味方ハイサムト云。（他本、味方の馬ならばいさむと云、敵の馬ならばいななくと云べし）

味方の敗軍ならば人数をあぐると云、敵のならばにげたと云。（他本、敵の人数ならば引といふべし）。

橋を引たるならば、敵の橋ならば引くと云、味方の橋ならばはぬるといふ。

味方の人数を出すならば打出すと云、敵の人数を出すならば出すと斗云べし、打とはいはず。

旗ならば、まく、たたむと不云、あぐるといふなり。

これらは全くその一斑に過ぎないのでありますが、一般の軍記物語に於ても、かゝる武士詞の特色の發揮せられた場合を見出すのであります。「引く」「退く」の語を避けて「開く」の語を用ゐるのが、その一例で、松井簡治氏の「大日本國語辭典」にも、

急ぎ何方へも御開き候べし（保元物語）

京都を無事故御開き候うて、將軍の御勢と一つになり（太平記）

などが擧げてあります。

併し、以上の例は、何れも單語を言ひ換へたものに過ぎないのでありますから、語彙方面の事柄に過ぎないとも見られるのでありますが、こゝに最も興味が深いのは、武士詞の敵愾心が文法方面にも關與して來る場合のある事であります。それは、卽ち次の通りで、

味方の手負たるならば、矢疵の時はいさせて候と云、今時の鐵砲も同前也、鑓にはつかせて候、十文字にはかけさせた、刀にはきらせたといふべし。敵の手負たるならば、いられた、うたれた、かけられた、きられたといふ也、味方には肉詞也。

味方の城を敵に破られたるならば破らせたといふべし。

節所山川谷堀を敵にこされたるをも、こさせたと云ふ。

卽ち、武士の意地といふか、その敵愾心は受身の場合をも、言葉の表現としては使役を以てあらはすのでありまして、これは軍記物語類にも屢々あらはれて來るものであります。これを單に受身と使役の混用と解するならば、その眞意を捕捉し得たものとは言はれないのでありませう。

能つ引いて放つ矢に與次が馬手の草摺のはづれを射させて引退けば、景重勝つに乘つてぞ驅け入りける（保元物語）。

俊綱討たせて命生きて何かせん、討死せんと（平治物語）。

あわてゝ船に乘つて、内裏を燒かせぬることこそ口惜しけれ（平家物語）。

二人の主を目の前に討たせ、親の首を敵に取らせて生きて歸るもいやあるべき（太平記）。

かくて、武士詞、殊に陣中詞の表現とその意圖する所は、大體その要領を述べた次第であります。「陣詞狀之抜書」にも、その結論として、

惣別軍陣にては書狀によらず何事に付ても、つよみを本とする物なり。萬事吟味分別入事也。此外色々詞は多く共、大體先此分に候。右にもしるすごとく、つよみを本として味方のきをなひを事とす、敵にはよわみを云なしなどする事、肝要也。

と說いたのも、至極もつともな次第で、かゝる武士の心理的原因がそれに適合した所の言語位相たる武士詞を生み出す事となつた譯であります。この樣な武士の強氣を示した實例を、最後に今一つ附加しませう、

斥候使武者ハ敵ノヤウスヲ申上ルトキ、前方ヨリ大將ト相圖ノ約ヲ定メ置、敵ノ人數ヲバ三分一程ニ申上ベシ、其外深キ川ヲモアサキヤウニ申上、カヽリ來ル敵ヲ云ニハ左ヲツキ、退ク敵ト云ニハ右手ヲツキ、カヽラヌ敵ニハ握リコブシニシ申上ル也。

（陣中言語集）

といふ個條があります。これを以て見れば、受身の場合を使役を以てするのも當然の處置と考へられる譯であります。

一三

武士詞の勇壯なのに對して、忌避隱微、卑屈の最も甚だしいものに盜賊語、卽ち泥棒言葉があります。國語位相論上採り上げるべき言語樣相は數多いのでありますが、旣に與へられた紙數も盡きますので、此處には最後の一例として盜賊語を略述し、樣相論の各論を終る事に致しませう。盜賊語はこの樣に忌避隱微の最も甚だしいものでありますから、隱語なる言葉に最もよく適合するのでありまして、その研究としては、前田太郎氏の「外來語の研究」（大正十一年四月）に收めた「隱語の話」（一八五—二二五頁）等があり、その語彙集錄の主なものには、

稻山小長男「日本隱語集」（明治廿五年）

高芝羆「隱語辭彙」（大正四年）

南波浚「隱語總覽」（昭和五年）

などがありますが、隱語の主體は盜賊・陶摸（スリ）・香具師等である事が分ります。

盜賊語の文獻に見える最も古い例は、足利義政時代の事を記錄した「臥雲日件錄」でありまして、その記錄の中に、

盜賊中有二隱語一。曰二止湯一、曰二合沐一、曰二發湯一。發湯者不レ論二貴賤一各飽レ所レ盜、曰二合沐一者諸賊等分二其財一、曰二止湯一者不レ論二多少一所レ盜歸二賊中首一也。

とあつて、沐浴の場合から聯想し來つた頗る興味深いものであります。江戸時代のものとしては、山崎美成の「海錄」瀧澤馬琴の「兎園小說」、廣瀨旭窓の「九草堂隨筆」等がこれに論及し、また所謂樂屋言葉たる「せんぼ」に就ては、「虛實柳巷方言」(寛政六年)、「辰巳婦言」(寛政十年)、「戲場樂屋圖會拾遺」(享和二年)、「田舍芝居忠臣藏」(文化十年)などに記載がある。(なほ、チヨーフグレの附錄に「はせんぼ考」があつて、以上諸書のものを再錄してある。)

盜賊語の記載は何れも語彙の集錄にすぎないのは、音韻及び文法の方面に於ては、何等一般の普通語と異るものではない事を示してゐると解すべきでありませう。從つて、此處にも、語彙方面の觀察に止る譯であります。而して、盜賊語の語彙を觀察した結果、これを最も要領よく分類したものは、「チヨーフグレ」の總論に紹介せられた南波杢三郎氏の「犯罪搜査法」に於けるものでありませう。即ち、盜賊語の成立方法は、(一)逆置、(二)省略、(三)形容、(四)擬人、(五)擬動物の五種となるのであります。

盜賊語の語彙中、最も顯著な特徵を示すものは、逆置の方法によるものであります。これは、その單語の音配置を逆置したものでありまして、その方法は極めて簡單でありますけれども、而もその結果は普通人には容易く察知し得ないものとなるのであります。これは、所謂「せんぼ」として江戸時代に記錄されたものにも見え、

口　ちく　　年寄　よりと

顏　おか　　大屋(家主)　やおほ

種　ねた　　本屋　やほん

などがそれであり、明治以後のものにも頗る多く現はれ、

姫　めひ　　英語　ごえい

銭　にぜ　　判事　じはん

紐　ぼひ　　石鹸　ぼんしや

筆　でふ　　袋物　ろつぶく

安い　すやい　　神祭　つりま

旅　びた　　活動寫眞　どうかつ

硝子　すがら　　拘留　りゆこう

洋傘　もりこう　　神官　ぬしかん

序ながら、この種類の方法は外國語に於ても見られ、例へば英語ではこれを back slang と呼び、その實例は、明治二十年に刊行された村松守義著「英和双解隱語彙集」にも既に見えてゐるのであります。

Cool　（見る to look）

dab　（惡な bad）

deb　（寢床 bed）

delog　（金　gold）

efink　（小刀 knife）

elrig　（少女 girl）

slop　（巡査 police）

erth　（三　three）

これに就て面白く感ぜられるのは、英語に於ては、音素を單位とする全然の逆置であり、我が國語に於ては音（音節）を單位とする全部又は部分的逆置である事であり、此處にも兩國民の音聲意識の相違が伺はれる樣であります。

盜賊語が隱蔽の目的で、單音に施す第二の特徴ある手段は、音の省略であります。これには、語頭音を省くもの、語尾音を省くものが主で、稀には頭尾とも省き、或は語中音を略する事もあります。先づ、語頭音を省くものを擧げて見ると、

宿屋	とや	停車場	しやば
談合	なし	拘留	りう
袂	もと	世間師	けんし
警察	さつ	まん引	ひき
夕方	まぐれ	老爺	やじ
婦女	なご	刑務所	むし
現金	なま	玩具	もちや
暦	よみ	おつとせ	とせ
繪葉書	がき	博覽會	らんかい

語尾音を省いたものには、

匕首	あい	短銃	たん
言語	げん	くるま	くる
蛤(陰門)	はま	紫(醬油)	むら
鋸	のこ	骨子	こつ
通貨	つう	木賃宿	ぼくちん

その他の例に、外國語源のものも加へて見ると、

天蓋張	てんばり	ストライキ	とらい
世話人	やき	小間物	まこ
法律書	りつ	喫煙	ば
女	うー	時計	すこ

この樣に、盜賊語に於ける音省略も頗る顯著な現象でありますが、これは普通語にも似寄つた音韻脫落があるのに比べると、自然の歷史的變遷に基づかず、人工的に故意に細工を加へる點に、重要な相違點が見附る譯であります。

盜賊語に於けるその他の特徴あるものは、外形には關係しないのでありますが、一つはその特徴を形容し、類推を擴げる事によつて生ずる第三類のものであります。例へば、

雪	厚化粧	霜	薄化粧

煙管　水鐵砲　銀側時計　饅頭
煙草　もや　舟　うきす
拳銃　はじき　醫師　さじ
閑散　しけ　雪駄　せんてい
女帶　こんぶ　帽子　かぶせ

など、この類は實例が非常に多く、分類を施せば色々になりますが、割愛いたします。

盜賊語に於ける意義轉換の第四の特徴ある方法は、擬人法を用ゐる事であります。隱語も原語を容易く想起し得るものでなければ、使用者自身が先づ困却する爲でもありませうが、その類推方法は頗る單純であります。例へば、土藏を娘といひ、犬を姑といふのは、自己の慾望の對象になる所に出たのでありませうが、既に「東閣小說」にも記錄せられた通り、江戸時代以來用ゐられてゐるのであります。この類の例を二三擧げて見ますと、

雷鳴　親爺　囚人　隱居
庭石　つんぼ　燐寸　ぼうず
眠る事　らふん　土藏破　色娘
强盜者　踊り子　金滿家　馴染
肴　きうべい　餅　まごべい

盜賊語の特徴ある第五類は擬動物語で、これも甚だその例が多い。これもその方法は簡單で、而も隱蔽の目的を達

する事が容易だからであらう。例へば、

冬服巡査	からす	夏服巡査	しらさぎ
破獄逃走	ねずみ	汽車	むかで
刑事	はやぶさ	細帶	うなぎ
酌婦	きつね	片盲目者	くじら
密告者	さる	饒辯者	たにし
官公吏	なます	藝妓	ねこ

盗賊語にもこの様に色々な變遷と由來があつて、その成立過程は一つではありませんが、その目的は一般人に知られ覺られる事を忌避するといふ點に歸するのでありまして、矢張り盗賊階級といふ一つの社會位相がそれに適應した所の盗賊語なる言語様相をうみ出すに至つた事は明かであります。

一四

以上、様相論中の第一種、社會的・心理的原因によつて位相を異にする言語様相の主なものに就て、個別的な記述をして來ました。これは、文法論に就て言へば品詞論の様なものであります。從つて、これに對して、更に文章論的な綜合が必要な譯でありますが、紙數の不足と研究の不充分のために、未だ詳論する機を得ないのは、甚だ殘念に存ずる次第であります。たゞ、一言を附加するならば、種々な國語様相は、必ず皆それに對應する社會位相があり、そ

の言語社會の要求する精神的根據に立つて發展し來つたのであるといふ事であります。從つて、この場合に殘された樣相論の綜合的部門は、かゝる精神的要求の檢討から着手せられるべきであると考へられるのであります。

國語の樣相論は、更に地域的位相の相違によつて起る方言の分化、また生理發達的位相の相違による兒童語等の成立の事實に對しても、論求しなければならないのでありますが、幸にして本講座にはそれらの爲に多くの項目が提供せられて居りますから、此處にそれを割愛しても、多大の御迷惑をかける譯では無からうかと思はれます。勿論位相論上の論述はそれらと全く一致したものとはならないのでありますけれども。

若し、それ、國語位相論の後半たる樣式論に至つては、講座出版者の寛容によつて、更に相當の紙數を提供せられる機會を待つ事に致しませう。下手の長談議を此處に打切り、謹んで讀者の御是正を乞ひつつゝ擱筆いたします。

（昭和八年五月三十一日）

昭和八年七月十五日印刷
昭和八年七月十九日發行

國語科學講座
（第二回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者 株式會社明治書院
代表者 三樹退三

東京市神田區三崎町三丁目八十九番地
印刷者 細谷祐三

發行所 東京市神田錦町一丁目 株式會社明治書院